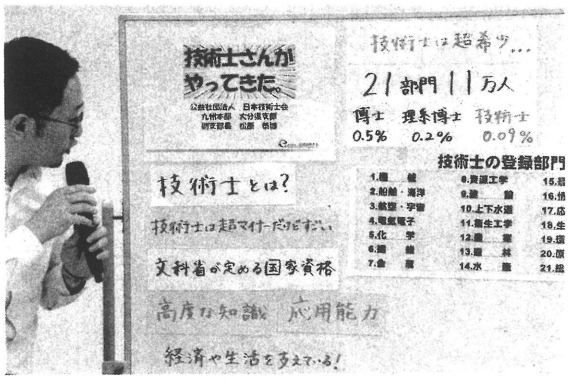
大分建設新聞（令和２年７月３日掲載）

学生へオンライン講義

士おおいた 各業種の役割伝える

減災 防災 支える人材を教育

大分大学



講義をする松原会長

県内建設関連7団体の若手経営者や技術者などで組織する「士（サムライ）おおいた」の各団体担当者は1日、大分大学の鶴成悦久減災・復興デザイン教育研究センター次長の講義「防災・減災を支える技術と人材」に登壇。学生たちへ仕事の内容、各団体の防災・減災への取り組みなどを説明した。

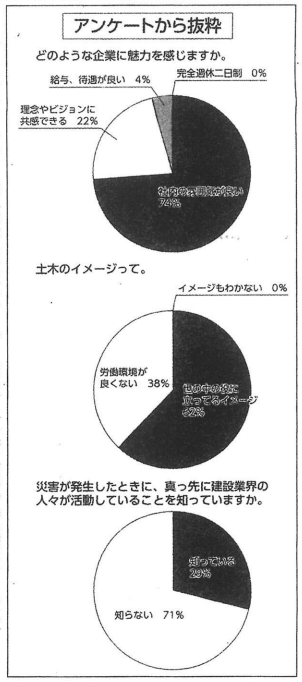
講義はオンラインのビデオ会議形式で開かれ、学生30人が参加。まず、鶴成次長が学生へ向け、「建設業を取り巻く環境は厳しい。人材不足は、事前防災、減災へ大きな支障をきたす。きょうの講座を聞き、各技術者の仕事内容などを知ってほしい」と呼びかけ。

おおいた建設人材共育ネットワーク事務局の鷲見孝明県建設技術センター技術部次長が「技術者を取り巻く環境と課題」と題し講義。建設産業の役割などを話し、「県内の建設就業者数は20年間で37%減少し、技術者のおよそ8割は40歳以上。30年後はさらに大きく減少する可能性もあるため、歯止めをかけなければ」と危機感を訴えた。

仕事紹介では、各担当者が自身が所属する団体と仕事内容、防災・減災への関りなどを分かりやすく紹介。時折、工事現場、ほかの技術者へ中継をつなぐなど、オンライン講座らしい一幕もあった。

学生たちへアンケートもあり、▽講義受講前に、建設関連業が防災・減災に強く関連していることを知っているか（知らない55%・知っている45%）▽災害発生時に、真っ先に建設関連業の人々が活動していることを知っているか（表参照、知らない71%・知っている29%）―と、多くの学生が建設関連業が防災・減災対策、災害発生時の復旧活動などで活躍していることを知らないという結果も。学生によると、自衛隊、消防などのイメージが最初に浮かぶとのことだった。

また、▽どのような企業に魅力を感じるか（表参照、社内の雰囲気が良い74%ほか）―では、多くの学生が給与、待遇面よりも社内の雰囲気を一番に挙げた。ある学生は、「長く働くのであれば、社内の雰囲気が一番大事」と話し、給与などよりも働きやすさを魅力に感じているという意見があった。



今回の講義は、大分大学の教養科目「減災科学Ⅰ」の一つで、対象は全学年、全学部共通。災害を理解し、災害リスクから防災・減災の視点に立った地域課題を学び、課題の解決と安全・安心社会の形成、持続可能な社会の追及をする人材を育成している。

学生へ講義した団体担当者は次の通り。

▽県コンクリート診断士会＝児玉明裕（㈱サザンテック代表取締役）▽県建設業協会青年部会長、士おおいた副会長＝江藤康世（㈱菅組専務）▽県土地家屋調査士会＝藤井茂雄（土地家屋調査士藤井茂雄事務所）▽県地質調査業協会＝太田宗一郎（タナベ環境工学㈱建設技術部長）▽日本技術士会県支部青年技術士交流委員長、士おおいた会長＝松原恭博（協同エンジニアリング㈱技術第二部次長）▽県測量設計コンサルタンツ協会＝帆秋文博（東洋技術㈱調査測量部課長補佐）▽県建築士会大分支部長＝伊藤憲吾（伊藤憲吾建築設計事務所。

（大嶋）